

アリストテレスの魂論における自己認識の可能性

岩田, 圭一
早稲田大学文学学術院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1564210>

出版情報 : 哲学論文集. 50, pp.103-121, 2014-12-26. 九州大学哲学会
バージョン :
権利関係 :



アリストテレスの魂論における自己認識の可能性

岩田圭一

はじめに

アリストテレスにおける「魂 (*ψυχή*)」の概念が、われわれが理解している「心」の概念と必ずしも一致しないことはよく知られている。例えば栄養摂取能力や感覚能力が魂ないし魂の部分とみなされ、それらがそれぞれの能力に対応する身体的部分を統御する原理として説明されるのを見るとき (cf. DA II 2, 430b11-13)⁽²⁾、アリストテレスにおける「魂」概念の独自性を理解することができるだろう。『魂論』第二巻に見られる魂についての一般的規定、魂の種類の違い、そして栄養摂取能力と感覚能力に関する論述から明らかのように、アリストテレスにおいて魂は、人間だけでなく他の動物も持っている生命原理にはかならない。しかし『魂論』第三巻において思惟能力ないし知性について詳しい論述が行われているのを見ると、アリストテレスがその能力を人間に固有の能力とみなしている限りにおいて、やはり人間の心の働きを説明することがアリストテレスの魂論において重要な位置を占めていることを示しているように思われる。

ここで注意しなければならないのは、人間の心の働きへの接近の仕方がアリストテレスとわれわれとでかなり異なっていることである。われわれが人間の心の働きを問題にするときには、意識の状態とか意識に現れるものとか、身体とは異なる心のあり様を解明することを考えるだろう。具体的には、言葉を用いて考えたり、外界の諸事物のさまざまな性質を感覚したり、自分の中で何かを想像したり、喜びや怒りや快苦などを感じたりといった、意識におけるさまざまな活動や状態のことを念頭に置いて、人間の心の働きを問題にするだろう。これに対してアリストテレスは、そのような具体的な人間の心の働きから考え始めるのではなく、³動植物の生命原理としての魂を身体的部分との関係で明らかにするという方針のもと、植物ですらもっている魂から始めて、人間も含めた動物に特徴的な感覚的魂についての考察を経て、人間に固有の働きである思惟能力の考察へと進んでいる。したがってアリストテレスにおいては、人間の心の働きについての考察がそれ自体としてまとまって行われているというよりは、その働きの或る部分、すなわち、感覚に関わる部分に関しては、他の動物と共通する心の働きとして考察され、また他の部分、すなわち、知性に関わる部分に関しては、人間に固有の働きとして際立った仕方を取り上げられている。つまり、アリストテレスの場合、人間の心のさまざまな働きを明らかにするというよりはむしろ、人間と他の動植物とで共通する魂の能力から人間に固有の能力へと進む仕方⁴で人間と他の動植物との区別を明確にすることが、その魂論の目的になっていると考えられるのである。

こうした、アリストテレスにおける人間の心の働きへの独自の接近の仕方は、解釈者たちがしばしば強調するように、アリストテレスの魂論が自然学的な観点に立ったものであることによるだろう。⁴確かにアリストテレスは、魂の諸能力を対応する身体との関係で説明することに力を注いでおり、視覚や聴覚といった個別的感觉に関する説明においてそのことがよく読み取れる（*De Anima* II-11）。また、思惟能力に関しては、対応する身体的器官が存在しないとされるが（III, 4, 429a24-27, 28c）、栄養摂取能力や感覚能力との区別によって見出された思惟能力は、やはり自然学的な観点で考察を進めた結果見出された能力であると言える。このように、大まかに見れば、アリストテレスの魂論は自然学的な観点に立ったものと言うこと

ができる。しかし、その魂論の展開の細部、そして『魂論』と関連する『自然学小論集』を見ると、アリストテレスにおいても、われわれが人間の心の働きとしてとくに思い浮かべる意識の働きが問題にされていることに気づく。アリストテレスの魂論における意識の働きについては、チャールズ・カーンが主題的に取り上げて示しているように、いわゆる共通感覚に關する論述から示唆を得ることができ⁵⁾る。本稿では、アリストテレスの魂論における共通感覚に関する論述を手がかりにして、アリストテレスの魂論において意識の働きがどのように問題にされているかを明らかにし、さらに自己認識という哲学的に興味深いテーマに関してアリストテレスの魂論の観点から何が言えるかを考えることにしたい。

1 普遍的な感覚能力としての共通感覚

アリストテレスは『魂論』第二卷第六章において、感覚対象に関して、視覚や聴覚といった個別的感觉に固有の感覚対象と、個別的感觉に固有ではない感覚対象とを区別している(II 6, 418a10-11)。個別的感觉にはそれぞれに固有の感覚対象があり、例えば視覚には固有の対象として色が、聴覚には固有の対象として音が、味覚にはその対象として味がある(413)。アリストテレスはこうした固有の対象に関して、「他の感覚によって感覺することがありえないもの」(411-12)、「またそれについて誤ることがありえないもの」(412)と説明している。例えば白という色をそれ自体として聞くとか味わうといったことはなく、また視覚は白であれ他の色であれそれが色であるということに關して誤ることはない(415)。このような感覚対象に加えて、個別的感觉に固有ではない感覚対象も存在する。アリストテレスはそのような感覚対象を「共通のもの」(κοινον) (410)と呼び、運動、静止、数、形、大きさを例として挙げている(417-18)。『魂論』第二卷第六章では、共通のものを対象とする感覚能力がどのようなものであるかということを示されていない。ここでは例として、或る運動について、触覚によっても視覚によっても感覺されると述べられている(419-20)が、このことは、運動が或る特定の個別的感觉に固

有の感覚対象ではなく、複数の個別的感覚によって感覚されうるといふ意味で複数の個別的感覚に共通の感覚対象であるといふことを示している。他の例については説明されていないが、同様に、複数の個別的感覚によって感覚されるものと理解できるだろう。実際、或る物体が静止していること、二つなのか三つなのかといった個数、どのような形や大きさをしてるかといふことなど、触覚によつても視覚によつても感覚されると考えられる。

このように第二巻第六章では、個別的感覚に固有ではない感覚対象も存在することが示されるのであるが、そのような対象を感覚する能力に関しては、複数の個別的感覚によつて感覚されうるといふことしか述べられない。しかし、個別的感覚についての論述が終わり、第三巻に入ると、共通のものを対象とする感覚能力として「共通感覚 (αἰσθητικὴ κίνησις) (III, 1, 425a27)」といふ能力が示されることになる。第三巻の論述において中心的な位置を占めるのは知性ないし思惟能力に関する論述であるが、アリストテレスは思惟能力に関する考察に先立って、個別的感覚と思惟能力との間に位置する魂のいくつかの働きについて考察を行っている。⁶第三巻第一―二章においてそのいくつかの働きの原因として挙げられるのが共通感覚である。さらに第三巻第三章では、人間が思惟能力を働かせるのに不可欠の役割を果たす「表象」といふ能力が取り上げられている。アリストテレスは「共通感覚」といふ概念に意味の幅をもたせており、魂のいくつかの働きを説明するのに便利に用いている。本節では、共通のものを対象とする感覚能力としての共通感覚を取り上げ、その意味について考えることにする。共通のものを感覚するといふ以外のいくつかの働きのうち、とくにわれわれの興味を引く内省的な能力に関しては次節以降で取り上げることにする。

共通のものを感覚する能力としての共通感覚に関する第三巻第一章における説明は必ずしも明瞭ではない。共通のもの例としては、第二巻第六章でも挙げられていた運動、静止、数、形、大きさに、一というのが加えられている。これらは個別的感覚によつて固有の仕方である——例えば色が視覚によつて感覚されるように——感覚されるのではない。アリストテレスはそのことを念頭に置いて、「われわれはそれぞれの感覚〔個別的感覚〕によつて、それら〔共通のもの〕を付帯的に感覚す

る」(一)は筆者による挿入(III.1, 425a15)と述べているのだと考えられる。例えば或る運動を視覚によって感覚する場合、われわれはその運動を視覚に固有の感覚対象として感覚するのではない。その運動は触覚によっても、あるいは聴覚によっても感覚されるかもしれない。つまり、われわれはその運動をたまたま視覚によって感覚しているのである。共通のものに個別的感覚によって付帯的に感覚するというのは、このように複数の個別的感覚によって感覚されうることを前提にして理解することができる^⑦。

ところがアリストテレスは、共通のものを個別的感覚によって付帯的に感覚することについて、「われわれはそれらのすべて〔運動、静止、形など〕を運動によって感覚するから」(III.1, 425a16-17)だと説明し、大きさや形を運動によって感覚するのだと述べている(217-18)。この説明による場合、共通のものを付帯的に感覚するとは、運動を介しての感覚という意味に解することができる。例えば或る運動を視覚によって感覚する場合、その運動を目で追う、すなわち目ないし視点が運動することによってその運動を感覚している。その運動を触覚で感覚するときは、手で触るなど手の動きが伴うことになる。また、或る物体の形を感覚するときも、物体の輪郭を目で追うことになるだろうし、あるいは、その物体に目を向けることも運動であり、あるいは目を閉じていたとすれば目を開けることも運動であるので、運動によって形を感覚することはさまざまな仕方で説明されうることになる^⑧。このように、共通のものを付帯的に感覚することの意味は、アリストテレスの説明に従うなら、何らかの運動を介しての感覚であることになる。

ところでアリストテレスはこの文脈(III.1, 425a14-28)において、視覚によって甘さを感覚する場合があることに言及している(22)。例えば白い角砂糖を見たとき、われわれはこれまでの経験から甘さを感じることがあるだろう。白い角砂糖を視覚によって感覚するとき、視覚が固有の仕方で感覚しているのは白である。しかしわれわれは同時に、その形や大きさといった共通のものを感覚し、さらにこれまでの記憶や表象の能力を用いることによって、甘さを感覚するのだと考えられる^⑨。このように、視覚だけで甘さが感覚されているのではなく、いくつかの魂の働きが関与することでその感覚が生じてい

る。そうすると、視覚によって甘さを感じるといふ言い方は省略的であつて、実際には、視覚とともに、いくつかの魂の働きがあつて、甘さの感覚が生じるのだと考えられる。しかしアリストテレスはここで、便宜上そうした働きの関与を省略し、「このこと〔視覚によって甘さを感じていること〕は、われわれがまさに両方〔視覚対象と味覚対象の両方〕についての感覚をもつていて、それら〔両方〕が一緒に生じるときに〔それらを〕同時に認識するということによる」(a22-24)と説明している。ここで、視覚対象と味覚対象の両方についての感覚がわれわれにそなわつてゐることが明らかにされている。もともとこの文脈においてアリストテレスが問題にしていたのは、運動や静止といった共通のものが個別的感覚に固有の感覚対象ではないということであつた。そこに、視覚による甘さの感覚という問題が入つてきて、それに関する説明の中で、今度は、複数の個別的感覚の対象と一緒に同時に感覚する能力が示されるのである。この感覚に名前は与えられていないが、この感覚は、個別的感覚対象を別個に感覚する個別的感覚とは区別される共通感覚であると考えられる。この場合の共通感覚は、いまの文脈で問題になつてゐる共通のものを対象とする種類のものではない。この文脈でアリストテレスが言いたいことは、その文脈の最後にあるように、われわれが「共通のものについての共通感覚をすでもつてゐる」(a27)と云つてゐるのである。

このようにアリストテレスは、共通のものを感覚する能力も、複数の個別的感覚対象を同時に感覚する能力も、ともに共通感覚とみなしてゐると解することができる。すでに触れたように、後者の意味での共通感覚においては、記憶や表象の能力が関与しており、その点でも前者の意味での共通感覚との違いが際立っている。後者の意味での共通感覚については次節で取り上げることにして、ここでは前者の共通感覚について理解を明確にすることにしよう。共通のものを感覚する能力を「共通感覚」と呼ぶとき、五つの個別的感覚と区別されるもう一つの個別的感覚があるという意味ではない。運動や静止、形などは、第六の個別的感覚によって固有の仕方では感覚されるわけではない。実際、運動その他は、五つの個別的感覚のうち二つ以上の個別的感覚によって感覚されるのであつて、第六の個別的感覚は必要ではない。共通のものを感覚する共通

感覚をアリストテレスが考えるのは、そのような第六の個別的感覚が存在しないことを語るためだとも言える。¹¹それは、ソクラテスやカリアスとは別個に人間のアイデアが存在するのではないという存在論上の見解と類比的である。アリストテレスにおいては、普遍的な人間（種）の存在は認められるが、これはアイデアのようにそれ自体で存在するものではなく、個別的な人間が存在するから存在すると言えるような、個別の実体の存在に依存するものである。これと同様に考えて、共通のものを感覚する共通感覚は、それ自体として一つの個別的感覚のように存在する能力ではなく、視覚や聴覚といった個別的感覚が存在するから存在すると言える、個別的感覚に依存する能力であると言えることができる。要するにアリストテレスは、共通のものを感覚する共通感覚という能力に関して、その能力が実際に発揮されるときには個別的感覚のどれかとして発揮される——もちろん複数の個別的感覚が同時に働くこともある——が、可能性としては複数の個別的感覚をそのうちに包含しているような、アリストテレス的な意味での普遍的な能力として理解していると考えられるのである。¹²

2 現実に即した感覚としての共通感覚

次に、複数の個別的感覚対象を同時に感覚する共通感覚を取り上げることにしよう。前節で、視覚によって甘さを感覚する場合があることに触れ、白い角砂糖を見て甘さを感覚するという例を挙げた。そしてこの場合、記憶や表象の能力が関与していることを指摘し、アリストテレスはそこで省略的に説明しているのだと考えた。前節で取り上げた文脈に続いてアリストテレスは、やはりそうした省略を前提として、視覚対象と味覚対象を同時に感覚する場合について説明している。そこでも、そのような感覚について「共通感覚」という名前は与えられていない。その説明は以下のとおりである。

しかし感覚が同じもの〔複数の個別的感覚対象をもつもの〕について同時に生じるとき、諸々の感覚〔複数の個別的

「感覚」は、相互のものどもに固有のものども〔複数の個別的感覚のうち他方のものに固有の個別的感覚対象〕を付带的に感覚する。ただし、それら〔複数の個別的感覚〕がそれら自身として〔別個のものとして〕ある限りにおいてではなく、一つの「感覚」である限りにおいてである。例えば胆汁について苦くて黄色いという〔感覚が生じる〕場合がそうである。(DA III, 425a30-52)

胆汁の例が挙げられているが、先に挙げた角砂糖の例で考えることにしよう。角砂糖に関して、甘さ(味覚対象)と白(視覚対象)が同時に感覚される場合——実際に見ながら味わう場合とも、先に見たように視覚を通じて甘さの感覚が生じる場合とも考えられる——、右の引用の説明によるなら、味覚が甘さを固有の対象として感覚し、視覚が白を固有の対象として感覚する一方で、味覚は白を付带的に感覚し、視覚は甘さを付带的に感覚するということになる。味覚が白を付带的に感覚すること、また視覚が甘さを付带的に感覚することは、味覚が白を、また視覚が甘さを固有の対象としてではなく感覚することを意味していると考えられる。しかし、固有の仕方ではないと言っても、味覚が白を感覚するといったことは奇妙に感じられる。そこでアリストテレスは、「ただし」以下の説明を与えているのだと考えられる。味覚はそれ自身としての限りで白を、また視覚はそれ自身としての限りで甘さを感覚しているのではない。この場合、味覚と視覚は一つの感覚である限りにおいてそのように感覚しているのである。しかし味覚と視覚が一つの感覚であるというのは、どのように理解することができるだろうか。味覚と視覚が同一の感覚であるということではないだろう。むしろ味覚と視覚が角砂糖という一つのものに同時に働いているということ、味覚と視覚が共同して働いているということだと考えられる。共同して働いているときに、味覚が白を、視覚が甘さを付带的に感覚することが可能になっているのだが、ここでアリストテレスは、一つのものに関して二つの感覚が共同して働いていることを、一つの感覚である限りにおいて働いていると考えている。二つの感覚が二つでありながら同時に働いているのではなく、一つの感覚である限りにおいて働いていると考えるのである。

共通感覚を想起させるこのような一つの感覚の存在は、続く第三巻第二章において明確に示される。そこでは、味覚と視覚が同時に働いているということだけでなく、さらに、味覚対象と視覚対象が異なることを識別するということが説明される。その説明によれば、われわれは白と甘さを比べて識別するのであり、われわれは白と甘さが異なることを或る感覚によつて感覚するのだという。つまり、視覚と味覚が同時に働いて視覚対象と味覚対象が同時に感覚されるのであるが、そのとき、視覚対象と味覚対象が異なることを識別する或る感覚が存在するというのである。白と甘さが異なることを識別することは、われわれには心の内省的な働きであり意識の働きであると思われるが、アリストテレスはそれを感覚によつて説明しようとする。ともかくアリストテレスは、白と甘さが異なることは、魂の側の一つの能力によつているのだと主張する。その能力は以下のように、点に喩えられて説明されている。

識別するもの (τὸ γνωῖν)〔識別する能力〕は、一方で分割されていないものとしての限りにおいては、一つであり、同時に〔識別する〕が、他方で分割されているものとしてある限りにおいては、同じ点を同時に二度用いている。そして、一方でそれ〔識別する能力〕は、限界〔点〕を二度用いる限りにおいて、二つの切り離されているものどもを或る意味で別々に識別する。他方でそれは、〔点を〕一つのものとして〔用いる〕限りにおいて、一つのを同時に〔識別する〕。(DA III 2, 427a11-14)

この説明に先立つ箇所においてアリストテレスは、白と甘さが異なることを識別する能力が一つのものとして存在しなければならぬと主張している(III 2, 426b17-23)。或るとき白を感覚し、別のときに甘さを感覚する場合、白の感覚においては視覚が、甘さの感覚においては味覚が働いている。これに対して、白と甘さの識別においては視覚と味覚が同時に働いている。その識別において視覚と味覚は、別々のものとして同時に働いているのではなく、一つの点に喩えられる仕方で働い

ている。これは先の引用で、一つの感覚である限りにおいてと言われていたのと同様である。右の引用において、識別する能力に関して、分割されていない場合と、分割されている場合とが区別されている。識別する能力が分割されている場合、視覚と味覚という二つの能力になっており、視覚によって白を感覚し、味覚によって甘さを感覚する。また、識別する能力が分割されていない場合、一つの感覚として存在しており、これによってわれわれは白と甘さを同時に感覚し、それらを識別する。思うに、点としての一つの感覚は、より現実には即した感覚のあり方を示している。われわれが現実の生活で感覚を働かせる場合、視覚だけ働かせて色のみを感覚するとか、聴覚だけ働かせて音だけを感覚するというよりも、複数の種類の感覚対象を同時に感覚し、記憶や表象の関与もあってそのつどの事象の感覚が成立しているというほうが、より事実に近いだろう。記憶や表象についてはここでは考えないことにして、ともかくわれわれの現実の感覚は点のような仕方では存在していると言える。現実はそのようなのであるが、われわれは、例えば一方で視覚が働いている、他方で聴覚が働いているというように、個別的感覚に分析するというところを行う。アリストテレスが同じ点を二度用いると言っているのは、こうした分析を意味していると考えられる。つまり、本来的に諸要素の集合とは言えない一つの点を、視覚として用いる場合と、聴覚として用いる場合とに分析するのである。角砂糖を感覚するとき、味覚によって甘さを、視覚によって白を感覚するというのは、分析的な観点に立つて言えることである。現実には、白くて甘いものの感覚は分析に先立って一度にわれわれに生じている。このような分析以前の感覚が点として説明されているのである。点としての感覚は、白くて甘いものを一つのものとして——別々にはなく——感覚するのであり、われわれの現実には即した感覚であると言えることができるだろう。この現実的な感覚を前提にして、白と甘さの識別も可能になっているのだと考えられる。

このように見てくると、第三卷第二章における一つの感覚に関する論述では、二つの働き、すなわち、複数の個別的感覚対象を同時に感覚することと、この同時的感覚を前提にして複数の個別的感覚対象を識別することが問題にされていることがわかるだろう。アリストテレスはその二つの働きを明確に区別しようとしておらず、とにかく一つの感覚があつて複数の

個別的感覚対象の同時的感覚があり識別があるのだと述べているように思われる。このことは、アリストテレスが一つの感覚——共通感覚と理解される——の存在を示すことに集中しているためであると考えられる。しかしよく考えてみると、その二つの働きには違いがある。複数の個別的感覚対象を同時に感覚することは現実に即した感覚のあり方を直接的に示している。これに対して、複数の個別的感覚対象を識別することは、同時に感覚されたものを識別するわけであるから、感覚された複数の個別的感覚対象を心のうちでいわば並べることにはかならず、意識の内部を見る内省的な働きであると言うことができるだろう。アリストテレスにおいては、「意識」の概念は示されておらず、そのこともあって、複数の個別的感覚対象を同時に感覚することと、それらを識別することとの区別が明確になっていないのではないかと考えられる。しかしアリストテレスの魂論の哲学的意義を考える上で、内省的な意識を想起させる共通感覚の働きは重要である。こうした内省的な意識の働きは、第三巻第二章のはじめで、自分が見ていることを感覚するということに関して、何によってそのような感覚が可能になっているのが考察される場合にすでに問題になっている。次に、第三巻第二章のはじめの論述、および関連する他のテキストを手がかりにして、内省的意識の働きをよく示す自己認識の働きについて考えることにしたい。

3 自己認識を可能にする共通感覚

アリストテレスは『魂論』第三巻第二章の冒頭で、われわれは自分が見ていることや聞いていることを感覚するという事実を目を向け(III 2, 425a12)、そのような内省的な働きとしての感覚について考察を行っている。第三巻第二章のはじめの論述(425b12-25)では、例えば自分が見ていることを感覚するのは視覚によってなのか、あるいは別の感覚によってなのかという形で考察が行われている。二つの選択肢のうちの一つ目の場合、人は視覚によって何かを見ているが、自分が見ていることもまた視覚によって感覚するということになる。つまりこの場合、視覚は、何らかの視覚対象を見ていると同時に、

この対象を見ていることをも見ている（自覚している）ことになる。¹³ここで視覚は、単に視覚対象を見るだけでなく、自らの活動（見る活動）をも見るという特別な働きをもったものとみなされている。これに対して、もう一つの選択肢の場合、人は視覚によって何かを見ており、そして視覚とは別の何らかの感覚によって、自分が見ていることを感覚するということになる。この二つ目の選択肢は、無限遡及が生じることを理由に否定されており、結局のところ、『魂論』のこの箇所では、或る個別的感觉の活動を内省的に捉える感覚は、当該の個別的感觉そのものであるということが示される¹⁴（B1517）。しかしながら、この結論に対してアリストテレスはすぐさま問題点を指摘する。視覚が感覚する対象は色ないし色をもっているものであるが、見ていることを内省的に捉えるのも視覚であるとする¹⁵と、その内省的な視覚の対象である見ていることもまた、色をもっているでなければならぬことになる（B1720）。ここでわれわれは、見る活動をしている視覚そのものがその活動を内省的に捉えるとする見解をアリストテレスが断念して、内省的な働きが共通感覚によって説明されることを期待するだろう。しかしアリストテレスはここでそうした断念は行わず、代わりに、視覚というのが必ずしも色ないし色をもつものを対象とするのではないことに言及している。それによると、視覚には、色ないし色をもつものを感覚するだけでなく、光と闇を識別する働きもある——この場合必ずしも目を開けている必要はないので色を見ているわけではないとされる——のだという（B2022）。後者の働きをする視覚が、内省的な感覚としての視覚である可能性が示されるのである。つまり、人が何かを見ているのは、色を対象とする種類の視覚によってであり、人が何かを見ていることを感覚するのは、光と闇を識別する種類の視覚によってであることになるのである。

このようにアリストテレスは『魂論』のテキストにおいて、或る個別的感觉の活動を内省的に捉える感覚として当該の個別的感觉そのものを挙げながらも、視覚の場合を例として、当該の個別的感觉の二義性に言及して、内省的な感覚のための個別的感觉が通常の個別的感觉とは別種のものであることを指摘している。しかしこの見解はアリストテレスにとって最終的なものではない。『魂論』のテキストで別種の個別的感觉が立てられているのは試論と考えることができる。¹⁶アリストテ

スはそのテキストにおいて、内省的な働きをする感覚の存在について確信をもっていなかったために、当該の個別的感覚の存在によって内省的な感覚を何とか説明しようと試み、苦肉の策として当該の個別的感覚の多義性を指摘するに至ったと考えられる。しかし『自然学小論集』の一節に目を向けると、アリストテレスが、内省的な働きをする感覚として、より適切な把握の仕方があることに思い至っていることに気づく。『睡眠と覚醒について』第二章における一節がまさにそのことを示している。

それぞれの感覚については、一方で或る固有のもの〔固有の能力〕があり、他方で或る共通のもの (τὸ ἐκ τῶν κοινῶν) 〔共通の能力〕がある。固有のものというのは、例えば視覚においては見ることがそうであり、聴覚においては聞くことがそうであり、他の諸々の感覚にとってもそれぞれにおいて同じ仕方で〔それぞれに固有の能力がある〕。しかしすべての感覚に随伴する或る共通の能力 (τῆς … κοινῆς δυνάμεως ἀκοινοῦσθαι δύναμις) もあって、これによって人は見ているとか聞いているということをも感覚する (ということのも実際、人は見ているということを見えるのではないし、そしてまた人は、諸々の甘いものが白いものと異なるということをも、味覚によっても視覚によってもその両方によっても識別することがなく、また識別することができなくて、むしろすべての感覚器官がもつ或る共通の部分〔共通の能力〕によってそうするからである。 (De Som. 2. 455a12-20)

ここではつきりと、個別的感覚とは種類の異なる共通の能力すなわち共通感覚の存在が語られている。右の引用において、「人は見ているということを見えるのではない」というように、『魂論』のテキストにおける見解は覆され、代わりに共通感覚によってそのような内省的な感覚が成立していることが示されている。興味深いことに、この共通感覚は、前節で取り上げた、複数の個別的感覚対象の識別という働きも担っていることが示されている。前節の最後で述べたように、

この識別は内省的な働きであり、見ていることを感覚するという内省的な働きとともに、共通感覚の働きとして整理されることになったのである。

こうして、内省的な感覚の働きを担う共通感覚の存在が明らかになるのであるが、人が何かを見ていることを感覚するという内省的な感覚から、自分自身の存在を自覚するという自己認識への道が開けてくる。『ソクラテスの弁明』において或種の自己認識が問題になっていることは周知のことだろう。美にして善なることについて知っていると知っているのではないかとソクラテス (Apologia Socratis 21d1-6, 7)、言い換えれば、それらについて知っているのではないことを知っているということは、徳の知に対する自己のあり方を捉えることであり、知という点での自己認識にほかならない。アリストテレスの『魂論』では、感覚するという或る種の生命活動をしている自身のあり方を捉える限りでの自己認識が問題になっている。ここで注意すべきことは、感覚することが生命活動だということである。或る個別的感觉が働いていることを内省的に感覚することは、自身の生命活動の一つを自覚的に捉えることである。感覚するという生命活動の働きは動物にとつて本質的であり、この働きを自覚することは、そのような本質をもっている自分自身の存在に気づくことである。感覚していることを内省的に感覚すること、自分自身の存在を捉えることとのつながりは、『魂論』の当該箇所との関連がよく指摘される『ニコマコス倫理学』第九卷第九章において示されている。そこでアリストテレスは、友の存在が自己の存在と同様に選択される(価値のある)もの (αἰετόν) であることを主張する (EN IX 9, 1170b7-8) にあたって、感覚していることを内省的に感覚すること、自己の存在を感覚することとのつながりについて以下のように語っている。

そして見ている者は彼が見ているということを感じ、聞いている者は彼が聞いているということを感じ、歩いている者は彼が歩いているということを感じし、他の諸々の〔活動〕の場合にも同様に、われわれが活動しているということを感じしている或るものが存在する (ἐστὶ τι τὸ αἰσθάνεσθαι)。したがって、もしわれわれが感覚しているなら、感覚して

いるということ（「われわれは感覚し」）、もしわれわれが思惟しているなら、思惟しているということ（「われわれは感覚していることになる」）。そしてわれわれが感覚したり思惟したりしているということ（「感覚していること」）は、われわれが存在しているということ（*en ênêv*）（「感覚していること」）である（なぜなら存在する（*to... êinai*）とは（人間の場合）感覚したり思惟したりすることであつたから）。（EN IX 9, 1170a29-b1）

ここに引用した部分は、自己の存在が価値あるのと同様に友の存在も価値あるものだということを導くための前提となる説明の一部である。その導出についてはここでは取り上げないことにし、われわれの現在の関心事に集中しよう。『睡眠と覚醒について』の先の一節では、内省的な感覚を可能にする共通感覚の存在を示すことに主眼が置かれていた。これに対して右の『ニコマコス倫理学』の引用では、内省的な感覚を可能にする能力ではなく、内省的な感覚をしている主体の存在に注意が向けられている。しかもここでは、見ているといった個別的感覺の活動に加えて、歩いているという運動、さらに、思惟しているという思惟の活動について内省的な感覚が働いていることが示されている。個別的感覺や運動は人間以外の動物ももつ働きであるが、思惟はアリストテレスにおいては人間に固有の働きである。したがって、自分が思惟していることを感覚する主体は人間である。さらに言えば、そのような内省的な感覚をしている主体は、私とか君といった個別の人間である。アリストテレスはこの点を明示していないが、この箇所が友の存在を語る文脈であることを考えると、ここで単に生物としての人間が問題にされているというよりは、私や君という個別の人間が問題にされていると考えるのが自然であるだろう。この文脈においてアリストテレスは、自己の存在を、いわば生物学的魂論の観点から考えて、感覚や思惟を働かせる形で生命活動をしているものとして捉えており、そのような活動をしている限りでの自己の存在を感覚することをそれ自体として快いことである（1170b9-10）と考えている。ここでアリストテレスは、内省的な感覚を、自己の存在が価値あるものであることを説明するために用いている。個別の人間がその生命活動を行っていること——それこそが存在していること

である——を自ら感覺することは快いことであり、それゆえに個別的人間にとって自己の存在は価値のあるものである。

このような自己の存在はアリストテレスにとって自明のものであり、その存在は疑われない。そこには、質料形相論を前提とする人間存在に対する理解があると考えられる。個別的感覚によって何かを感覺していることは身体の特定の器官を用いることによって成立しており、身体の特定の器官が身体全体の存在の中で問題なく機能していることを前提にしている。身体なしには魂のさまざまな働きは成り立たないのであり、魂にとって身体は不可欠であり (cf. *DA* II 2, 414a18-20) 自明の存在である。そしてそのような個別的感覚の活動そのものを内省的に感覺することもまた、身体の特定の器官を用いることによってしているとされる。その器官とは、『睡眠と覚醒について』の中で示される「支配的な感覺器官 (τὸ κυριον αἰσθητικον)』 (*De Somn.* 2, 455a21) である。アリストテレスは心臓がその器官であると考えたようであるが、われわれとしてはそれを脳と理解することもできるだろう。ともかく、内省的感覚の働きも身体の特定の器官を前提としており、身体全体の自明な存在から考えて、内省的感覚の働きは幻影ではなく真実の働きであることになる。そのような仕方で自身の生命活動を内省的に感覺している自己は、アリストテレスにとつて疑いのような存在である。友の存在が価値あるものであることを語る際にアリストテレスは友の存在を「もう一つの自己 (ἑτερος... αὐτός)」として示している (*EN* IX 9, 1170b6-7) が、このことは自己の存在が確実であるからこそ言えることだろう。

おわりに

本稿の第3節で見たように、アリストテレスは、共通感覚およびこの能力を担う第一の器官の存在を前提にして、内省的な感覚の対象として自己の存在をわれわれに明らかにしている。自己の存在を内省的に感覺するという形で自己認識が成り

立つのである。しかしながらアリストテレスにおいては、そのような内省的な感覚の主体と、そのような形で捉えられる自己の存在との関係について、さらに立ち入った哲学的考察が行われているわけではない。内省的感覚によって対象化される自己と、内省的感覚によって自己を感じる主体的な自己とを明確に対比するとか、この対比を前提にして主体的な自己のあり方を明瞭化しようという哲学的な試みは、まだ行われていないように思われる。しかしそれでも、アリストテレスにおける自己認識についての考察は、自己認識の問題をわれわれに考えさせることを可能にする有意義な考察であり、これによってわれわれは自己認識の問題の入口に立つことができる。自己認識の可能性を示すアリストテレスの考察は、この種の問題にかかわるその後の哲学の展開に対して一つの重要な問題提起を行ったという意味で、再評価されてしかるべきものと言えらるだろう。

註

- (1) 筆者はここで、ウィリアム・ジェームズが「意識の流れ」を説明する文脈で用いている、意識の状態がそのうちにあるところの各人の「心 (minds)」を念頭に置いている。 Cf. William James, *Psychology: Briefer Course*, Harvard University Press, Cambridge, Mass., 1984, pp. 139 ff. (W・ジェームズ『心理学 (上)』今田寛訳、岩波書店、一九九二年、二二二頁以下。)
- (2) 『魂論』のテキストは W・D・ロスによるもの (W. D. Ross, *Aristotle, De Anima*, Clarendon Press, Oxford, 1961)、『睡眠と覚醒について』のテキストも W・D・ロスによるもの (W. D. Ross, *Aristotle, Parva Naturalia*, Clarendon Press, Oxford, 1955)、『ニコマコス倫理学』のテキストは I・バイウォーターによるもの (I. Bywater, *Aristotelis Ethica Nicomachea*, Clarendon Press, Oxford, 1894) を使用。
- (3) Cf. Charles H. Kahn, 'Sensation and Consciousness in Aristotle's Psychology', in J. Barnes, M. Schofield and R. Sorabji, eds., *Articles on Aristotle*, vol. 4, Duckworth, London, 1979, p. 3.

- (4) Cf. Kahn, 1979, p. 4, S. Everson, *Aristotle on Perception*, Clarendon Press, Oxford, 1997, pp. 1-2.
- (5) Kahn, 1979, pp. 1-31.
- (6) 共通のものを対象とする共通感覚、個別的感觉対象を感覚していることを感覚する共通感覚、複数の個別的感觉対象を識別する共通感覚がある。ここに挙げたものについては本稿で取り上げる。その他、付帯的感觉対象を感覚することを共通感覚の働きとみなす W・D・ロスの解釈 (Ross, 1961, pp. 34-35) もあるが、この解釈はカーンによって批判されている。Cf. Kahn, 1979, p. 17. また、睡眠と覚醒の説明において共通感覚の働きが問題になる (cf. *De Som.* 2)。Cf. Ross, 1961, p. 36.
- (7) この付帯的感觉の意味については以下を参照。Cf. D. W. Hamlyn, *Aristotle De Anima, Books II and III, Translated with Introduction and Notes*, Clarendon Press, Oxford, 1968, p. 117.
- (8) 共通のものを運動によって感覚するとうづ場合の「運動」についてはさまざまな解釈の可能性があるが、ここでは諸解釈の検討は省略し、わかりやすさを最優先した解釈を提示している。諸解釈の検討に際しては以下を参照。Cf. R. D. Hicks, *Aristotle De Anima, with Translation, Introduction and Notes*, Cambridge University Press, Cambridge, 1907, p. 428, R. M. Polansky, *Aristotle's De anima*, Cambridge University Press, Cambridge, 2007, pp. 371-372.
- (9) 白い角砂糖を見ただけで甘さを感じるのは、以前に味覚にゆづその甘さを感じしづるからである。Cf. D. K. W. Modrak, *Aristotle: The Power of Perception*, University of Chicago Press, Chicago, 1987, p. 64.
- (10) Cf. Hicks, 1907, pp. 430-431. 複数の個別的感觉対象を同時に感覚する共通感覚については、次節で詳しく論じる。
- (11) そもそも、『魂論』第三巻第一章の冒頭に示されているように、この章の目的は、五つの個別的感觉以外の個別的感觉が存在しないことを示すことにある。
- (12) この説明は、共通のものを感覚する共通感覚について言えることであって、次節以降で取り上げる共通感覚にはあてはまらなると筆者は考へる。
- (13) アリストテレスは、自分が見ていることを視覚によって見るとした場合、「それ〔視覚〕がそれ自身についてあることとなる」(425b15)と述べている。なお、第三巻第二章のはじめの論述 (425b12-25) の解釈については以下を参照。Cf. L. A. Kosman, 'Perceiving that We Perceive: On the Soul III, 2', *Philosophical Review* 84, 1975, pp. 499 ff.

- (14) 無限遡及がどのように生じるかについては明瞭な説明がないが、アリストテレスはここで図式的に、視覚対象と視覚の働きという二項に対して、見る活動(A)を捉える第三の項として「別の感覚」(X)を考えているものと思われる。そして別の感覚(X)が見る活動(A)を捉えるという活動(B)に対しても、もう一つの別の感覚(Y)が立てられ、この感覚(Y)によって先の活動(B)が捉えられると考えているように思われる。このように考えると、確かに感覚(X, Y, …)が無限に生じることになる。また、アリストテレスは無限遡及の困難を述べると同時に、無限遡及が生じないようにする考え方も示している(429b16)。先ほど、見る活動(A)を捉える第三の感覚(X)を立て、この第三の感覚による活動(B)を考え、さらにこの活動(B)を捉える別の感覚(Y)を立てた。ここでもし活動(B)を捉える別の感覚(Y)を立てずに、活動(B)を捉えるのはその活動をしている感覚(X)そのものだとするならば、無限遡及は生じないことになる。この考え方をとるのであれば、そもそも最初から、見る活動(A)を捉える第三の感覚(X)を立てないで、見る活動をしている当の視覚そのものがその活動を内省的に感覺しているのだと考えるのが合理的である。実際この最後の考えがアリストテレスの考えである(417)。
- (15) テクストでは、「見ているものを見る(ὄνεται… τὸ ὄπθον)」(419)とあるが、見ていることを見ることが話題になっていると考えられる。ただ、この箇所文脈だけで考えるなら、テクスト通りに「見ているものを見る」と解し、その「見ているもの(見る器官)」もまた色をもっているものでなければならぬと言われていると解するほうが自然である。この箇所の難しさの説明としては以下を参照。Cf. Hamlyn, 1968, pp. 122-123.
- (16) 以下で見る『自然学小論集』では、内省的な働きを担う能力として共通感覚が立てられている。ここで筆者は、『魂論』から『自然学小論集』への内容上の発展を主張するカーンの見解に従っている。Cf. Kahn, 1979, pp. 16-17.
- (17) 「支配的な感覚器官」についての詳しい説明、および心臓の代わりに脳を考える可能性については以下を参照。Cf. Kahn, 1979, pp. 13-14, 20-21.

(早稲田大学文学学術院・教授)